

## 第4回家庭教育支援指導者等研修 実施レポート

日時：令和3年11月25日（木）10時～15時 参加者：63名（うち市町村から41名）

今年度の最終回を迎えた第4回研修は、1年ぶりとなる対面型での開催となりました。「キャッチできる体制をつくり、持続可能な家庭教育支援のあり方を考えよう」というテーマのもと、社会的養育の状況や子ども家庭総合支援拠点の整備、コミュニティ・スクールの取組と家庭教育支援とのつながりについて学びました。キャッチは保護者や学校、支援体制等に主体的にかかわっていくからこそ生まれ、有効になると理解することができました。



### 【午前の部 講話】

前半は県健康福祉部地域・家庭福祉課副主幹の**村雲 伸一**氏より、「秋田県内の社会的養育の状況と学校や地域との連携」と題し、お話しいただきました。はじめに、里親や児童養護施設等で生活する児童数、県内の児童養護施設や里親委託の状況と、社会的養育を必要とする子どもを、学校や地域と連携し、チームでサポートする重要性について説明されました。また、里親の種別（週末里親・ショートステイ・養育里親・専門里親・養子縁組里親・親族里親）を、要件や費用、親子関係の観点に沿って説明されました。また、家庭教育支援チーム等が里親へ関わっていくときには、重くならないような雰囲気づくりが大切ではないかと考えを述べられ、対象となる方へのアプローチの仕方（配慮）に示唆を与えてくれました。後半は同課副主幹の**櫻田 淳二**氏より、「市町村子ども家庭総合支援拠点の進め方～切れ目のない支援～」と題しお話しいただきました。子ども家庭総合支援拠点は、市町村が設置主体となる子どもの総合的な支援機関であり、現在は秋田市・仙北市・横手市・湯沢市で設置されています。ここでは、身近な子ども支援の相談ができること、地域情報や学校等との連携が図りやすいこと、面的な支援体制（家庭訪問や子どもの顔が見える支援）が可能であること、妊婦や子育て世帯も含めた切れ目のない支援ができることが紹介されました。

### 【午後の部 鼎談】

午後は「コミュニティ・スクール(CS)における家庭教育支援チームの展望」と題して男鹿市家庭教育支援チーム員**小玉 由紀**氏、男鹿市立船川第一小学校長**佐藤 和久**氏、当センター社会教育主事**皆川 雅仁**が、佐藤氏の前任校である脇本第一小学校CSでの実践を中心に議論しました。はじめに皆川が文科省CSマイスターであった経験を踏まえ、全国及び県内におけるCSの導入・実施状況等について説明しました。中でも、実質的に行われているCSには熟議が存在し、その必要性・重要性を認識し、実施することの意義を強調しました。これを受けて小玉氏は、男鹿市家庭教育支援チームが学校や保育園に出向き、学習発表会やPTA時にお茶っこサロンを開いたり、放課後子ども教室支援員と連携して子どもを預かったりしながら、保護者が気軽に話ができて、雑談の中から悩みや不安を出せるように努めていると紹介しました。続いて、佐藤氏は脇一小CSの組織体制や取組事例等を紹介しました。学校運営協議会が主催する熟議では、回を重ねるごとに教職員や保護者も多く加わるようになり、テーマも「もしかして反抗期？子どもとどう接する？」など、身近なものも取り上げられるようになったとお話しになりました。さらに、PTA授業参観時はどうしても小さい子どもをもつ保護者の参加率が上がらないという学校課題にも、家庭教育支援チーム等が託児や子育て相談を引き受けている体制を紹介。熟議での話題が実際に取組につながっていると、その効果を話されました。結びに皆川は、CSの推進に向けて、共感的関係性から生まれる協働の大切さを強調しました。



### 【参加者アンケートより】（抜粋）

- ・自分の知識のなさを自覚した。福祉関連のことは勉強不足だが、そちらにも家庭教育支援チームとして支援できそうだった。チーム活動のあり方を探求している段階の為、どのように展開すべきか悩ましく思った。
- ・小玉氏の「雑談、会話の中から課題をキャッチ」が大切だと思った。そういう感性が私には不足していた。
- ・脇一小CSの取組に感動した。地元地域のCSの課題が見えてきた。次の運営協議会で今日の研修報告をしたい。